

「約束のお言葉を与えられ」

マルコによる福音書 7章 24 - 30節

森島 牧人 牧師

ガリラヤから始まった主イエスの宣教は、「自分たちこそが選ばれた神の民」と主張するユダヤ人に拒絶され、殺意さえも持たれることとなっていました。加えて、頼みとする弟子たちの理解の乏しさ、覚束なさも主イエスを悲しませ、主の疲労をさらに大きなものとしていたのです。そんな中、主は人々を避けテイルス地方へ行かれます。今日の聖書はその地での出来事で、「シリア・フェニキアの女の信仰」という小見出しが付いています。

テイルスは、異邦の地と言われたガリラヤの、さらに向こうにあるローマの属州で、フェニキアの代表的な港町でした。偶像を崇拜する典型的なこの異邦の地へ、主は入られたのです。それは、異邦人を汚れているとして接触を避けていたユダヤ人への反論であったかも知れませんが、十字架が近づく中、静かな祈りの場所を求められてのことであったのかも知れません。いずれにしても、この主イエスの異邦の地への宣教は、この後、福音が地の果てにまで伝えられて行くことになることの原点となるものでした。

さて、主がその地に来られたという噂は、主の意に反してすでに広まっていました。聖書には「(主イエスは) ある家に入り、だれにも知られたいと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。女はギリシャ人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。」(マルコ 7 : 24 - 26) と書かれています。この母親は、古いギリシャ語を日常の言葉とするカナンの血を引く、まさに完全な異邦人でした。彼女は主イエスの噂を耳にすると、恥も外聞もなくその家にとび込み、主イエスの前にひれ伏したのです。その姿は、娘を救えるのはこの人以外にないという、主イエスへの女の圧倒的な信頼の告白以外の何ものでもありませんでした。

ところが、そのような女の姿を見ながら主イエスは、「まず、子供たちに十分食べさせなければならぬ。子供たちのパンをとって、小犬にやってはいけない。」(同 7 : 27) と拒絶なさるのです。ユダヤ人に与えるべきものを、犬である異邦人に与えることは出来ないという、この卑しめる表現を使つての主イエスの拒絶に、私たちは疑問を持ってしまいます。しかし、これを別の角度から見ると、彼女は、主から問われているのだと分かります。ですから、彼女は主の問いに答えます。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も子供のパン屑はいただきます。」(同 7 : 28) と。これは、<救世主はユダヤ人の中に生まれたが、主イエスの救いはユダヤ人に限定されているものではない。だから、主イエスが与えられるパンは、異邦人(の私の娘)にも、どうしても必要>と、明言するのです。

主イエスにのみ救いがあるとした彼女のこの言葉に、主は、「それほど言うのなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」(同 7 : 29) と言われます。彼女の言葉が、主イエスに受け入れられた瞬間でした。聖書には「女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。」(どう 7 : 30) と記されています。まさに主イエスのみがなし得る、約束どおりの御業だったのでした。

来週からアドベントに入ります。クリスマスを迎える準備をしつつ、今日の御言葉も併せて、クリスマスの意味を考えながら歩んで行きたいと思えます。